

グローバル化の中の中国社会：共同研究：中国における社会と文化の再構築 グローカリゼーションの視点から (2008-2011)

著者	韓 敏
雑誌名	民博通信
巻	133
ページ	26-27
発行年	2011-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10502/5085

共同研究 ● 中国における社会と文化の再構築 ―グローバル化の視点から (2008-2011)

はじめに

本共同研究は、2008年秋にスタートし、中国を研究対象とする20人の人類学者によって構成されている。本研究のキーコンセプトであるグローバル化は、世界化と地方化、あるいは世界の均質化と多様化の同時進行を意味するものである。すなわち、政治・経済・文化の均質なグローバル化が進む中で、人々は支配的なものを標準として受容しながら、自分たちの集団、地域、エスニシティ、ナショナルリティ、ルーツと伝統を意識し、再構築すると同時に、「グローバルな競技場」においてローカルなアイデアやモノを発信し、普遍性のあるものにしようとしている。本共同研究は上記のグローバル化の視点から現代中国の社会と文化の変化を考察するものである(韓 2010)。

2010年度において研究会が2回(6月27日、12月11日)開催され、ゲストスピーカーを含めて7人が研究発表を行い、メンバー全員が以下のような課題に焦点を当て、中国のグローバル化の実態とメカニズムを考察した。

歴史の視座からみる中国のグローバル化

グローバル化は歴史の過程である。大航海時代において、それはヨーロッパの政治体制の植民地化、キリスト教や香辛料、中国茶の普及などの形で現れ、産業革命後の資本主義の勃興や第二次世界大戦後の多国籍企業の急成長、東西冷戦の終結によって、いっそう加速されるようになった。本共同研究は、グローバル化を人類の長い歴史の中で異文化が出会い、受容したり、融合したり、包摂したり、土着化したりする歴史の過程として考えている。

具体的に、中生勝美(桜美林大学)が「20世紀初頭のフランス宣教師による中国民俗研究」を、井口淳子(大阪音楽大学)が「多民族都市・上海租界の芸術の諸相―1920年代から1940年代を中心に」について検討した。この2つの事例の共通点は、中国のグローバル化を20世紀の初期にさかのぼり、それにかかわる複数のアクターに注目し、複数の言語によって記録された歴史文献について徹底したテキスト分析を行ったところにある。中生はフランス語の雑誌である*La Chine*(1921年創刊-1924年)を通して、フランスのキリスト教団の宣教師からみた中国社会の近代化、西洋文化の土着化と民間信仰のあり様を分析し、西洋人、とくに16世紀以降のカトリック宣教師と中国文明の接触により始まったシノロジーの研究成果が、いかに20世紀のフランス宣教師たちによって新たな展開をみせたのかを検討した。また、燕京大学、輔仁大学などのミッションスクールの事例を通して、キリスト教団による中国での宣教と中国における西欧の民族学・社会学の導入とその土着化の関連性



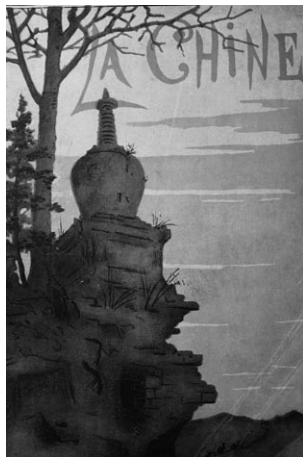
上海フランス租界の劇場、蘭心大戲院(Lyceum Theatre)(2010年9月、井口淳子撮影)。

を考察した。

一方、井口は複数の文化の会う場である20世紀前半の上海租界に焦点を当て、アヘン戦争、ロシア革命、日中戦争、国共内戦など戦争によってもたらされた華洋雑居の現象が、「租界文化」を生成した様子を分析した。また、蘭心大戲院(Lyceum Theatre)などでみられた、第二次世界大戦中に世界の最先端にあった上海の西洋音楽の様相を考察し、租界は現在の上海の祖型と指摘すると同時に、植民地支配によってもたらされた文化という偏った視点への反論を試みた。

政府主導のナショナルとローカル文化の再構築

中国のグローバル化の主要な主体である中央と地方政府に注目し、ユネスコの無形文化遺産(Intangible Cultural Heritage)などの理念と認定制度を検討した。阮雲星(中国・浙江大学、国立民族学博物館外国人研究員)は、貴州生態博物館と閩南文化生態保護区の例を通して文化生態(cultural ecosystem, cultural ecology)概念の導入と認定のプロセスを考察し、認定後、民間団体の増加と研究者の役割の増大がみられ、政府の認定がある程度、民間の文化自覚をもたらしたが、一方、文化遺産の申請と認定が地方政府によって「業績化」されている問題も指摘した。上記の問題点は、陳宗花(中国・河南大学、国立民族学博物館外来研究員)による河南の馬街書会と豫劇(300年以上の歴史を持つ河南省の伝統劇)の報告からもうかがわれる。陳によれば、600年の歴史を持つ



フランス語雑誌*La Chine*の1921年創刊号表紙(2010年、中生勝美撮影)。

つ、河南で年に1回行われる芸の見本市である馬街書会が、国家級非物質文化遺産に指定されたことにより、民間芸能人自身は行政と商業的関心の二重の圧力を受けるようになった。政府派遣の芸能団体による馬街書会の支配と観光化によって民間芸能人は萎縮する現象が起きている。

また、清水拓野（関西学院大学）の「博物館建設と学校設立にみる演劇文化の再構築過程——陝西地方・秦腔の事例から」の報告によると、経済的基盤の変化や娯楽の多様化の影響を受けて、存続の危機が起きていた秦腔（陝西省、甘粛省、青海省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区などの西北地方で行われている古い伝統劇）は、政府主導で無形文化遺産に登録され、「秦腔博物館」の建設によって再活性化しつつある。次世代へ秦腔の文化の伝承が課題として残されているが、政府主導の取り組みとは別に、民間の演劇学校の設立も、秦腔の活性化に一定の役割を果たしている。



春節時に広場の観客の前で秦腔を演じる俳優（2008年1月23日、西安・長安區、清水拓野撮影）。

グローバル化のアクターとしての個々人

19世紀以前のモノ、20世紀のカネと比べて、21世紀のグローバル化の特徴は、個々人が世界をフラットなものとして生きることである（Friedman 2005）。本共同研究は、個々人をグローバル化のアクターとみなし、その例として19世紀後半から世界で普及した近代的技術による火葬と、NGOに焦点を当てて、近代的技術とNGO組織の理念がいかに土着化され、制度化され、実践されているのかを考察した。グローバリゼーションという用語が経済領域から離陸して以降、そこに含まれるキーワードにおいて、テクノロジーは不可欠なものとなっている。

田村和彦（福岡大学）による「火葬テクノロジーを飼いならす——中国内陸部の葬儀施設で働く人々の事例から」の報告は、火葬場の個々の従業員の技術の習得と運用を分析し、制度化された近代のテクノロジーである火葬の葬法は、微細で身体化された技術の集積であると結論付けた。すなわち機械のデフォルト使用よりも自らの身体知が優先され、制度面での分業の調整といった行為のチューニング、道具の創出、身体的知覚を用いた作業の学習と運用を行うことで、テクノロジーが具現化されている。

思沁夫（大阪大学）は、「中国の環境保護民間組織（NGO）の現状と課題」について、北京にある2つの草の根NGO組織の「地球村」、「自然之友」を事例に、1990年代後半に中国で市民権を得たNGOの理念と実践のプロセスを考察した。舶来のNGO（非政府組織）は、最初は「反政府」「無政府」を連想させ敬遠されていたが、現在、「非政府、非営利、自発性、自主性」といった要素を備えた民間組織の総称となり、政府部門、営利部門とともに社会を構成する三本柱とみなされるようになってきている。中国の環境保護の草の根NGOには2つの特徴がある。第1に学者、記者、芸術家などの知識人がリードし、大学生、定年退職者、政府の役人も参加する点である。外国滞在経験があり、西洋や日本から影響を受けた知識人たちは、市民が行動するという理念を環境保護に取り入れ、「綠色文明＝地球にやさしい」といった中国的表現に翻訳すると同時に、自然環境を人間の生命の一部としてみなす東洋独自の思

想から環境保護の理念を構築することを意識し、「楽和家園」のような概念を打ち出し、西洋と東洋の環境意識の融合を試みている。第2に、環境保護のNGOは学校や町の市民に対し、環境教育を行い、環境保護の理念のみならず、具体的なごみ分類、環境保護の行動規範などのような実践のレベルにまで力を入れている。

一方、中国の草の根NGOは多くの問題を抱えている。まとめると主に以下の3つである。まず、政府への登録が必要であり、環境保護に対する一般の人々の関心度が低いため、中国の草の根NGOは政府主導で生まれた官製NGOと比べると常に資金不足の問題を抱え、地域との連携が弱く、政府との関係が強いという点である。また、運営資金が不足するため、海外のNGOの下請けとなりやすく、独自性が欠けている。3点目は、NGOの構成メンバーは大学生が多く、給料も安いことから、組織としてのNGOは流動性が高く、人材流出が問題点となる。

これまでの研究成果をふまえた上で、2011年度は、①項羽祭祀の伝承と資源化、②エスニックシンボルの創出、③祝祭日の再構築、④中国宗教の市場経済化、⑤宗親会の越境、などから中国のグローバル化の実態のメカニズムを分析する予定である。



旧式火葬炉を操作する職人（2001年、陝西、田村和彦撮影）。

【参考文献】

- Friedman, Thomas. 2005. *The World Is Flat: A Brief History of the Globalized World in the Twenty-first Century*. Farrar, Straus and Giroux.
韓敏 2010「中国のグローバル化の人類学的研究」『民博通信』129: 18-19。

かんびん

民族社会研究部教授。専門は文化人類学、中国研究。著書に『回廊革命と改革：皖北李村の社会変遷と延續』（江蘇人民出版社 2007年）、編著に『Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies』（Senri Ethnological Studies 76, 2010）、『革命の実践と表象：現代中国への人類学的アプローチ』（風響社 2009年）など。